大道

第拾四卷
第四號

八月號

■世界の動亂と國民思想の歸趣
■天心に當る
■『慈光錄』序文
■米價調節と人心調節

郵便物認可
大正十四年三月十八日郵便物第三種

世界の動亂と國民思想の歸趣

◎我國も遂にチエツク兵援助のために、出兵せねばならぬ樣になつた。世界の動亂は、我國民の立場を明らかにせねばならぬ樣に余儀なくせしめらるゝ。獨墺に對して、聯合國の一として、飽まで戰はねばならぬことだけは明らかであるが、抑々何の爲に戰ふのであるか、戰ふて果して何れの處に船を着けんとするのであるか。

◎軍國主義、帝國主義の思想を抱けるものとして、いたくない腹をさぐらるゝし、つまらぬことであるが、さればと言つて、民主主義、自由主義のために戰ふのであるとまで、英佛首相や米國大統領の道連れとならねばならぬか、是までつッこんでくるとたぢろがぬものは少なからう。

◎此度の戰爭は、一面は言論戰である。何れの國の責任者も、堂々として自己の主張を明言して居る。此點に於ては公明正大である。而して我國に於ては、未だ國論の一致を出見し得ないといふは、殘念なことである。是畢竟國民思想の歸趣が明らかでないからである。畢竟信念が確立してないからである。信ずる所は堂々として宣言すべきである。何ぞ必しも他國に氣兼する必要はないのである。

◎併此際我國の立場も亦困難である。忌憚なく言はしめば、歐米に於て、帝國主義と民主主義と、かくまで極端に戰ふこと自身が、禍亂の源である。換言すれば、自己の利益のみを主張する、殘害殺戮迭相呑噬の軍國主義も感心しないが、正義を標榜し、理想を主張して、自己ばかり義人氣取りの、我慢剛情の一點張りも感心しない。要するに歐米の思想夫自身に於て、必しも是

認すべきものと斷ずることが出來ぬ。此點に於て我國は、亦超然たる我國自身の立場あることを自覺せねばならぬ。

◎人間は自己を主張する罪惡の塊である點に於て、深く自覺せねばならぬ。是米國が如何に正義を主張するも、義人を氣取るも、畢竟一面に於ては自國の利益を主張するといふ一點に於ては決して怠るものでない。否常に我國との利害衝突の場合に於て、一歩もひけをとるものでない。夫はよいとするも、若し自家本領の民主主義の主張までも我强にひんとするならば、そはあまりに自を以て他を律せんとするものである。

◎全體西洋の思想といふものは、自分を絶對に正義として、飽まで戰ふといふのが最終の歸結である。必しも武器の戰のみならず、思想上の戰に於ても亦然りである。是が寧しろ西洋の宗教の本領である。犧牲、獻身、殉教、いかにも名は美はしくある。然れども畢竟此等の名の下に自我を主張するに過ぎないのである。所謂執着心の强いといふのが是である。結局我執の國である。是が我國の武士道の如き、一面は飽まで戰ふが、最終に平和を見出さんとする所に光明があるものとは、根本的に懸隔がある。

◎最終の平和を來するには、各自が自己の罪惡を懺悔して、絶對の眞實者に歸入する精神的轉換があらねばならぬ。是聖德太子の篤敬三寶の信條の起り來る所以である。西洋の宗教は此點に於て、たしかに人生の樞軸に觸れて居らぬ。畢竟自ら神の名の下に正義なることを主張して、其自家主張、自己生存のために他を犧牲にし、他を蹂躙するの罪惡たることを自覺する力が頗る鈍い。

◎西洋が常に革命の殘忍を敢てして顧みないが是である。從來歴史上に見たる悲劇を、之を露國に面り見ることになつたのは、實に寒心の至である。畢竟自己を絶對善なりと見ることが、人間が我の折れぬ根源である。トルストイの無抵抗主義が、遂に私有財産を否認

し、裁判を否認し、戰爭を否認して、結局思想上無抵抗主義といふ大抵抗を持來したも、此西洋の我執の離れぬ所から來るのである。此點に至りては佛敎の無我無碍と相去ること百由旬である。

◎是に至りて人生は絶對眞實者に歸入して、圓融無碍の光明に接せねばならぬ。而して此無限の光明によりて、如何なる逆惡も、叛罪も、衝突も、執拗も、和融せられねばならぬ。一たび此根源に觸れずんば、人生平和の根源は來らぬ。本願圓頓一乘は、逆惡攝すと信知して、煩惱菩提體無二と、すみやかにとくさとらしむ。人間は此弘願一乘海に歸入せねばならぬ。

◎我國自身の立場を自覺するには、一たび此超然たる高處を占めて、世界を達觀する眼光を開かねばならぬ。人皆黨あり、亦達するもの少しといふが、畢竟西洋各國の現狀である。我是なるときは彼非なり、彼是なるときは我非なり、我必しも聖にあらず、彼必しも愚にあらず、共に是れ凡夫耳といふ自覺も、少しはありてもよさそうなものである。少くとも此の如く、我是なりとのみ主張することが、人生禍亂の源であることを反省して見てもよさそうなものである。

◎併此の如き西洋思想の抵抗爭鬪に對して、我國の思想界は、果して如何なる程度まで自覺しつゝあるか。固より我國本來の思想には、たしかに徹底したる立場を有することは疑ないが、現代の實狀は如何であるか。軍閥主義官僚政治の服從主義にあらざれば、輕佻なる自由思想の放縱主義に外ならぬではないか。而して未だ徹底したる自覺思想の立場を見出す者がない。若しそれ眞の自覺を見出すならば、我も彼も皆五分五分の我利主義である、我も人も善し惡しといふことをのみ沙汰して居るのである、如來の思召すほどに知り通すとのなき我等が、是非善惡の沙汰は、皆そらごとたわごと、まことなきわざである。此の如き不實不眞の我等を悲憫して見捨てざる眞實者、卽如來に歸依し奉るばかりである。此如來の淸淨眞實によりて、虛假不實の我等を哀愍攝受したまふのである。是卽大願海に歸入したのである、智慧海に轉入したのである、是眞心徹到したる金剛心である、如來回向の眞實信心である。

◎此金剛心なるもの、眞實心なるものは、彼理想主義の如く自己を正義として、他を罪惡視するものではない。寧ろ自己の不實不眞を認めて、しかも如來の眞實心のために、攝受圓融せられて、其不眞實を慚愧するものである。如來の淸淨眞實を認むるほど、我身の罪惡を懺悔するものである。然れども、之がために決して退嬰消極の思想に陷ることなく、寧しろ五濁惡世の我等のためにあらはれたまひし如來の眞實なれば、此世界動亂の大濁世に處して、唯此眞實に救はれて、安んじ且つ進むばかりである。

◎所謂商をもせよ、奉公をもせよ、獵漁をもせよ、政治をもせよ、實業をもせよ、算盤をも執れ、鍬鋤をも執れ、劍をも銃をも執れ、かゝるあさましき罪業にのみ朝夕まどひぬる我等ごときのいたづらものを、悲憫したまふ如來の大悲に安住して、粉骨摧身すべきである。

○載とりて戰ふときも、自己の主張をなすときも、一面には五濁動亂の煩惱生活たることを懺悔すべきである。然れども此煩惱のために、動亂破壞せられざる金剛堅固の信心に安住して、勇猛精進すべきである。而して此如來淸淨の眞實心たるや、十方衆生老少善惡を問はず、皆廻向せらるゝものである。古今東西何れの世何れの人か、此慈悲に浴せざるものあるべき。如何なる獰猛なる軍國主義も和融さるべく、如何なる放縱なる自由思想も、此悲願によりて嚴肅なる秩序觀念を生ずべきである。玆に於て君則天之臣則地之なる信念より、而も背私向公なる臣道を生ずべきである。卽信順信樂の根本より來る、上下君臣の秩序を生じて、而も四海兄弟の同朋主義を實現すべきである。是卽ち我國民思想の歸趣にして、且つ世界動亂の根本を和融せしむべき平和の源泉である。

天心に當る

近角常觀

一　大經五惡段第二段

『大無量壽經』に五惡段とて、人道を五つ通りに說かれた處があつて、そこの文字が一々實際に的中、私共の腹ぐこを刺るものがある。殊にその二段は君臣の關係に於て、私共の眞實て無きことを說かれたもので、その全文は次の如くである。

佛言はく、其二惡といふは、世間の人民、父子、兄弟、室家、夫婦都て義理無く、法度に順せず、奢婬儒縱にして、各意を快くせんと欲へり。心に任せて自ら恣にし、更相欺惑す。心口各異にして、言念實無し。姦詐不忠にして、言か巧にして謾ひ媚び、賢を嫉み、善を謗りて、怨枉に陷し入る。主上明ならずして臣下を任用し、臣下自在にして、機僞多端なり。度を踐み能く行ひて其形勢を知る。位に在りて正しからず、其が爲に欺かれて、妄に忠良を損じて、天心に當らず。臣は其君を欺き、子は其の父を欺き、兄弟、夫婦、中外の知識、更相欺誑す。各貪欲恚癡愚擬か愛さ、自ら己か厚せんと欲して、多く有らんことを欲貪す。尊卑上下心俱に同じく然なり。家か破り身をこぼして、前後を顧みず。親疎內外之に坐して滅ぶ、或時は室家、知識、鄉黨、市里の愚民野人、轉共に罪に從ひ、更に相利害して、怨を成し怨を結ぶ。富有れは慳惜して、貴て施與せず、愛貪貪重して、心勞し、身苦む。是の如くして竟に至りて、恃怙する所無し。獨來り獨去りて、一も隨ふ者無し。善惡禍福、命を追ふて生ずる所なり。或は樂所に亘り、或は苦毒に入る。然して後乃し悔ゆとも當に復何を及ばん。世間の人民心愚に智少く、善を見ては憎謗して蔽ひ及ばんことを思はず、但惡を爲さんと欲して、妄りに非法を作す。當に盛心か懷さて、他の利か怖望す。消散一際盡して、復求索す。邪心不正にして、人の色有るを儻る。豫め思ひ計らず、事至りて乃し悔ゆ。今世に現に王法の牢獄有り、罪に隨て趣向して、其の殃罰を受く。其の前世に道德か信せず、善本か修せさるに因りてなり。今復惡を爲れば、天神剋鬪して其の名籍を別ち、殃終り、神識て惡道に下り入る。故に自然に三途無量の苦有り。其中に展轉して、世々果報に出る期有ること無し。解脫か得難し、痛み言ふ可らず。是か二大惡二痛二燒と爲す。精苦することは此の如し。譬へば大火の人身か焚燒するが如し。人能く中に於て心を一にし、意か制し、身を端うし、行か正しくして、獨善か作して衆惡か爲さざれば、身獨り度脫して、其の福德度世上至泥洹の道か獲。是か二の大善と爲るなり（以上）

大經五惡段といふのは、總てが斯ういふ調子であつて、如何にも私共の實際に適切なる文章である。私など讀み慣れて常には左程に思はぬも、……殊にその文字が一々、如何にも好いと疾くから考えて居つたことであつた。例へば今の處にある『妄に忠良を損じて、天心に當らず』の文字の如き、天心とは佛敎に於て何ういふ風にも言ふことが出來るであらうも、先づ眞の正しき天道の心に當らぬ、天道の心に背くといふ文字である。卽ち斯れ〳〵の行ひをして、天心に叶はぬといふは如何にも嚴しき示され方である。これは、親鸞聖人なども折々この五惡段の文字を採つて用ゐておいてになるのである。有名なる『化身土卷』末の主上臣下法に背き義に違し、怨を成し怨を結ぶ。の如き、こは法然上人が專修念佛の敎を說かれた時に朝廷與つて憤りて、上人を流罪に處し奉つたことを書かれた處にある文字である。必ずしも之が五惡段の文字と言ふことは出來まいなれども、今擧げた處にある『主上明ならずして臣下を任用し、臣下自在にして、機僞多端なり……臣は其の君を欺き、子は其の父を欺き、兄弟、夫婦、中外の知識、更る〳〵相欺誑す。……轉共に事に從ひ、更に相利害して、怨を成し怨を結ぶ』あたりを讀む時は隨分著しく政治上にも、又我々親子家族の關係の上にも、私共の不善の心を極言してあるのに驚くのである。去りながら又『唯信鈔文意』てあつたと思ふが、矢張り今の二段の中にある『心口各異、言念無實』の文を引いて、聖人が示されてある處がある、それには聖人は

だからしてそういふ心があつてはいかぬと書かれてあるので無い。善導大師の『外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ。内に虚假を懐けばなり』を講釋せられる處に、『眞に我々の心は善く出來無い、うそ、僞りである。經に心口各異言念無實とあるが、如何にもその如し』と言ひ放しにされてあるのである。『そうあるから可かぬ』とあるのではなくて、我々の心は然うだと言うてあるのである。

二　五惡段は抑止門の意味

こは全體五惡段全體が、見やうでは佛の方から我々の心を見抜いて下されて、我々の心は斯く〳〵の狀ならんがと、佛よりして言うて下された言葉と取る時は、だからそういふ惡しきを止めて』といふよりも、寧ろ『斯く迄も我々の惡しきを知し召して、言ふて下されたか』となりて、罪惡觀の懺悔の言葉、即ち機の深心の文となつて來るのである。併し玆氣を附けねばならぬは、今の罪惡觀、機の深信の意味だと言ふ時は、直ぐ『惡しくてもよいのだ』と、從來說敎などで聞いて居る風になり易いのであるが、然うではない。さりとて亦『そふいふ心があつて可かぬ』でもない。大低の方の間違ふのは、玆のひと所であるのである。それは見やうによると『大經』五惡段は人道を說き、『あれを仕ては可かぬ、これを仕てはいかぬ』と、誡められたところの敎へとなる。誡められたとする時は、即ち我々の仕てはならぬことを示されたことになる。――話が妙な方にそれたのであるけれども、我々『あーいふ風に仕てはならぬ、斯ういふ風に仕てはならぬ』と言うてるのであるけれども、然らばそのことを皆な實際に仕て居無いのかと言うに、皆な現にそのことを仕て居るのである。仕てならぬことは充分承知しながらも、その爲すべからざることを現に皆なやつて居るのである。その點より言ふ時は、今日社會の各部面に表はれ居る事どもなど、一つとして天心に當つて居らぬ。――この天心に當らずといふ言葉は如何にもよい言葉、政治問題などの上に用ゐても、如何なる內閣、如何なる政治にも適切なる言てある若し如何なる內閣でも之を彈劾するとなれば、これ以上に用ゐて適切なるは有るまい、と思はれる程にある言葉である。併し玆は政治問題を言はれたので無く、我々の心の中を言ふて下されたのである。それになると即ち人道を說いた敎である。即ち『大經』を一名『過度人道經』の名がある位て、我々の護る可き人道を說いて下されたものである、我々の仕てならぬ人道を示されたものであると讀む時は、即ち御承知の釋迦如來の抑止の意味となる。即ち『大經』本願の文に於て『唯五逆と正法を誹謗するものとをば除く。』と誡められた、釋迦如來の抑止門の意味となつて來るのである。

三　釋迦抑止の眞意

併し常に言ふ話なれども、或所で入らざる金使ひ仕て來た小供を父親が叱つて『小供の身の上でそんな金使ひをするて無い。以後は決して仕てならぬ。早く自分で行つて然る可く處置仕て來い』と。――これは有つた話故言ふのであるが、或所で中學へ通つて居る小供が入らざる金を使つて來た。父親は『使つて仕まつた金なれば、拂つて遣らぬとは言はぬが、併しそんな金を拂ひに行くに、汽車などに乘りて行く可きで無い。汽車賃は遣らぬから、十里あらうが二十里あらうが、歩いて行け。』父親が嚴しく叱り付けて小供は仕方なく、泣く〳〵門を出て行つた。あとで母親を呼び寄せて『何うだ出て行つたか。汽車賃を遣らなんだが、お前汽車賃を渡してやつたか。』『遣つては惡いのかと思つて、遣りませぬでした』と言はるゝのを聞くなり、俄に樣子を變へて、

『何だ怪しからぬ、馬鹿な奴だ、あんな小供が汽車賃無しで行けると思ふてるか』と、却つて遣らなんだ母親の方をひどく叱られたといふ話である。即ち氣がつくと最も嚴しく叱る父の意は、遣るべきては無けれ共、陰から母親が渡すべきものと、思うて居つた父の慈悲心であつたといふのである。そこて早速金持つて番頭が追うて行き、追ひ付いて渡された時の小供の心は何うて有つたらう。『そういふ親の慈悲心であつたか、有難う』の外無かつたらうと、思はれるのてある。故に今五惡段も、それは如何にも御文の如く、斯れ〳〵の五惡は仕てはならぬ、そういふことを仕た者は、彌陀の本願にも洩れ、助からぬぞとある釋尊の嚴誡である。故にそこになると如何にも嚴しく人道を說いて、叱られた。併し叱る慈父の意は、決して叱り仕舞ひて無い。即ち誰も知る如く『觀經』に至りて、阿闍世王が親に逆害を加へ、提婆が佛を傷め、韋提希夫人が不孝な子を持ちて、身の置き處も無く苦まねばならぬことが起つて來た。その淺間しきが起つた時に、その五惡十惡の者を救はんある、彌陀悲母の本願であるとお說き下されてあるのてある。恰も前に嚴しく叱られた釋尊が、あとで母親に、金渡したかと言はんばかりの勢でお說き下されてあるのてある。故にこの五惡段はこの人道を守らねば助からぬと言はれたのてあるから、守れぬ者は助からぬのだと取る時は、大經の上に釋尊が人道を說かれた眞精神を頂いた者て無い。他力眞宗の敎は、その守らねばならぬ五惡段の道に背かぬやう、人道が行へる我々て無いのてある。その爲すべからざることをする罪惡の我々なのてある。故に

その仕てならぬ事をする、その仕やうなきを哀はれみ給ふが佛の御眞實と、この大悲心から喚發し來つた處の釋迦慈父の嚴誡てましますのてある。而して『そこ迄惡しきを斯く迄に思召し給ふお心か』と、この御眞意を聞きて、徹底を持つた處が眞實の信仰てある。而して徹底して見ると、一々佛の言葉の如く、外に賢善精進の相を現ずるも、內に虛假を懷いて居る處の我々てある。如何にも『心口各異にして、言念實無し。』『主上明ならずして臣下を云云』『臣はその君を欺き、子はその父を欺く』など、一々が皆な

自分のことを懺悔の言葉と變つて來るのてある。而してそうなつた結果を、第三者の立場から見ると、茲に初めて人道が行へるやうになつたと、斯くなるのが他力眞宗の信仰の順序なのてある。

四　親鸞聖人の讀經眼

全體この五惡段の文は、已上言ふ如く、極めて適切てあるに係はらず、

親鸞聖人は左程に用ゐておいてにならぬのてある。先づ減多に使用しておいてゞ無いのてある。御存知の如く三毒段の『必得超絕去、往生安養國、橫截五惡趣、惡趣自然閉云々』の文と、『其有至心、願生安樂國者、可得智慧明達、功德殊勝』の文と、そして先き言ふ『心口各異、言念無實』の文と、それから今いふ『主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨を結ぶ』の文が、今の五惡段からて無からうかといふ位て、殆ど引いてお出てにならぬのてある。こは人によると『大經中』で、下卷の『佛告彌勒菩薩』から以下は、御經が違ふので無からうか。何か他の經が這入つて居るのては無からうか。何うもそこ迄は『佛阿難に告げたまはく、々々々』と、阿難に對して說かれてあるのに、茲から俄に彌勒菩薩に變つてあるは、何か外の經が加はつたものては無からうか。甚しきになると、支那に這入つてから、誰か附け加へたものてなからうか。と言ふ人さへある程てある。又御存知の如く『大經』の異譯の種類は五存七欠と申して、十二通りあつたと申すのてあるが、その中には現に茲から先きが無いのがあるといふ程てある。處がこゝらの點になると親鸞聖人は達眼て、例へば第十八の本願の文を御覽なさるにしても、

直ちに本願の方に眼を着けて、唯五逆と誹謗正法の者は除くとある抑止の方には、更に頓着しておいでになる樣子が無いのである。之など實に著しきことで斯ういふことは私共常に拜見して驚く所である。聖人は經を御覽なさるにしても、例へば彌陀の本願を言はれるにしても、一切經の中『華嚴經』にも最後は面見阿彌陀佛とあるからとか、イヤ『法華經』の普門品にも原本て見ると阿彌陀佛とあるからとか、然ういふ理屈に涉つた方面は、

そういふことは親鸞聖人は放つたらかしである。設え何處にあらうと、苟も眞實とあれば、阿彌陀佛の眞實である、如來とあれば眞實の阿彌陀如來て無いか、無碍とあれば無碍光佛のことであると、そこになると理屈無し、直覺的に攫んで來て示されるのてあるから、いと易い。處が

その易いことが却て一々本當に叶つて居るのである。

何と申さんか、これこそ眞の眞實に直到して示されたといふべきで、聖人のは總てこの行き方てあらるゝのである。故に大經にせよ何にせよ、皆なこの御眞實一つを示されたとなる處から、今の五惡段にしても、五惡段が何うの斯うのと、そんなグチヤ々々仕たこと、聖人は一言も言はれて無い。殊にいつも私が有難く思ふは、

親鸞聖人が十八願の願文を書かれる時に、法然上人でも善導大師でも、

若し我れ佛を成らんに、十方の衆生、我が名號を稱して下十聲に至らん。若し生れずは正覺を取らず。

と、必ずこれ丈けてとめてあるに、聖人は

必ず唯除五逆誹謗正法の文を欠かさず書いておいでになることてある。本願の文を言はれる處には、ひと所として之が抜いてあるのは無い。それは五逆誹謗正法の者は助らぬとの意味で書いてあるのでは無くて、入らぬ金を使ふと承知せぬぞとは、

他人なら言はぬ言なのである。親が子供の先き〳〵迄も遺瀨無く思ふ親心から出る言葉なのてある。聖人の御子善鸞上人が、聖人と信仰が違つた爲め勘當せられたといふ話は、昔から問題がある處であるも、違つた爲め怒つて勘當なされたては意味をなさぬ。

勘當仕給ひたお心は『この慈悲を頂かぬと一生勘當だぞ』卽ち『何處〳〵迄も頂かねばならぬぞ』との御親心でましますのである。茲は能く味はつて貰はねばならぬ。妙な處で話に力が這入つて、併し却つて話しよくなつて來たやうである。

五　世界を支配する思想の二潮流

實は今日話さんと仕たのは、

近頃の西洋の思想問題、――世界動亂に伴うて、思想上の動搖も著しきやうに思はれる故、それらに對して考えて居る處を聞いて頂かうと思ふて、この題を出したのである。併し西洋三界の話となつて、

肝腎の私共內心の自覺としての點が、力が抜けては無意味故、西洋のことゝせず、又思想上のこととせず、我々の內心の實際問題であると、御銘々の心の上の事に執りなして聞いて頂くに、今の五惡段の言葉がよいと思うて、この題を選んだ譯けであつたのであつた。先づ西洋と言はず、日本と言はず、斯ういふことをせねばならぬ、あーいふやうに仕なくてはならぬ』と、飽く迄規律的に、律法的に、種々命令を下してやつて行くとなると、それは今日の所謂

國家主義の思想であつて、卽ち『この國家を何うにかせんければならぬ』『國民の思想を統一仕なくてはならぬ』『忠孝の思想を振作しなくてはならぬ』イヤ『斯ういふやうに修養仕なくては』『あーいふやうに涵養仕なくては』とやつてゆく、そういふ方面に出て居る思想を語ることゝなるのてある。處が先き程言ふことを忘れたのてあるが、父が子供を叱つて『斯ういふ風にせねばならぬ、あーいふやうに仕無くてはならぬ』と言ふと、子供は父の眞意がとれぬもの故、父が

無暗に叱つて壓迫すると取ると同やうに、今言ふ如き國民の思想に統一をつけ、『あーいふ風に仕なくては、斯ういふ風にせなければ』の、今日如き律法的な遣り方は、人の心を型に入れ、壓し付けるものゝ如く誤解仕易いといふよりも、寧ろ言ふてる人自身が、それになり易い恐れがあるのである。それと同やうに又『母が陰から流車賃は與へるぞ』の思想が間違つて、恰も今日の眞宗信者の信仰が、『惡くてもよいのである、淺間しくても構はぬのである』と、甚しき誤謬におちて居る如く、『父はあーいふけれども、母はあとで金呉れるに決まつて居るのである。惡しくても構はぬのである。何仕たつてよいのである』と、一方にこの放縱なる思想が顯はれて來ると、先づ大體斯ういふことになりて居るやうにあるのである。こはこんな大ざつぱな言ひ方をすると、所謂今日の思想問題に關係して、緻密な見方を仕て居らるゝ人達は、亂暴な奴だと思はれるかも知れぬけれども、先づ此頃の新しき思想といふ側は、我々は忠をせなくてはならぬ、孝を仕なくてはならぬと、何程頭ごなしに言はるとも、我々は無自覺にそんな型が受け入れらるべきで無い。矢張り人間なれば、腹がすけば喰べずには居れぬで無いか。身體があればかばはなくてはならぬでは無いか。結局我々は自分の本然の要求する處に從つてやるより仕やうが無いで無いか』と、即ち今日の自由思想、自然思想といふ側は、こういふ方に出てあるやうに思はれるのである。而して之をも一歩進めていふと、先きの統一主義に出る方は、軍國主義、帝國主義の形の下に、世界を統一せんとする、獨逸思想がそれであると思へるし、後者の『國家の如何といふよりも、先づ我々は個人の自由、個人の平等といふことが問題である。我々の要求する所は、國家の戰勝では無くして、我々はパンを欲するのである』と、之になれば即ち露西亞流になる如く思はれるのである。而してこの思想の二つの流れが、今日世界の上で戰つて居るのであるし、又その流れは日本の上にもある。猶ほ本當に言へば我々一人々々の上にある。即ち私共今日は『斯うせねばならぬ、あーせねばならぬ』と、一生懸命やつて居るかと思ふと、明日は『そういふたつて出來ないことは仕やうが無いで無いか』忽ちこの投げ出し主義に出て居るのである。即ち我々一人の身體で、この兩方をやつて居ると、斯ういふことになりて居るのである。

六　共に思惑たるを免れず

そこで思ふに、この問題は之を何ういふ風にすれば、本當に解決を見ることが出來るのであるか。その點より思ふさまのことを言ふと、今言ふ我々の心任かせにするといふ方も、私より言ふと矢張り一つの自分の思惑を立てやうといふのである。又『あーせねば、斯うせねば』と、一つの型にはめ込んで行くといふ方も、矢張り一つの思惑立てやうといふのである。——大分妙な話具合になつたのであるが、獨逸があのやうに戰爭して　世界を自分の思想の下に統一して行かうといふのも、無論一つの思惑を立てやうといふのであるし、又片方がそれであるに、一方は軍備を徹し戈を收めて、御自由になされといふ露西亞式の遣り方は、何んと言はんか、私は兼ねてトルストイの無抵抗主義が形をとつたもので無いかと思うて居つたのであるが、昨日も聞くとレニンは、『設えトルストイが生きて居たつて、自分の遣るやうより仕やうが無いだらう』と言つて居るとの話である。矢張り一つの恐ろしき思惑を立てやうといふのである。こは一體トルストイの無抵抗主義は、一寸聞くと善い

やうであるも、考えなくてはならぬは、喧嘩する方も一つの思惑を立てやうと言ふてるのであるも、『せぬのぢや〳〵』とやつて行く方も、矢張り思惑を立てやうといふのである。即ち

『せぬのぢや〳〵』て、結局抵抗して行くことになつて居るのである。故にあなた方の方は、土地を占領しやうと何う仕やうと、自分の方は何處迄も無抵抗でやりますといふ下から、併しこの自分等の思想を何處迄も獨逸國民の間に普及させなくてはならぬと、即ち露西亞式の遣り方も、斯く飽く迄我慢張りて行くことになりて居るのである。即ち佛教の最も難有い處である。我々の我慢を廻へし、我々の思ひを廻へすといふ、この信仰味の方は、何れにしても毫髪も認むることは得ぬのである。この點より言ふ時は、設ひそのことが正義であり、眞實であつても、それだからとて之を振り廻はすとなれば、可かぬとなるのである。

七　解決のつきがたき西洋思想

こは矢張り私などが苦んだ時も、自分は何處迄も宗教の爲め、正義の爲め、自分の我慢を捨て、自分の身を犧牲にし、人と爭はず、飽く迄彼の蘭相如が廉頗の下に謙り下りてやりたるが如くにやるべきである。自分としては何處迄も彼の蘭相如の態度でやらなくてはならぬと、それで自分では眞劍に遣りて居だと思うて居つたのであるけれども、考えて見るといつ迄も

『俺は蘭相如である、彼は廉頗である』『俺は釋尊である、彼は提婆である』と、之でやるのでは何時迄ゆきても切り無しである。こは待て〳〵！　自分が自分を蘭相如と見て居る限り、相手も私が惡いのだとは言うて呉れぬから、之では何時迄やりても五分々々である、抵抗であると。——故に私はトルストイの無抵抗主義の誤謬は、茲にあると思ふのである。成る程形は無抵抗であるけれども、矢張り無抵抗といふ一種の抵抗である。これはそういふ抵抗では可かぬから、今度はこの無抵抗で無くてはといふ、そういふ人間のお互沙汰で茲が解ける位なら、初めから宗教は入らぬのである。故に茲は我々武器をとるのも戰ひであれば、取らぬのも矢張りそういふ思惑でゆかうといふ、矢張り一つの戰ひであるといふ。斯く善きに就け惡しきに就け、何處迄も我慢張りて行かうといふのが、我々の怖ろしき性分である。茲になると如何な方法でも如何な敎えても、最早や我々如何とも仕て見やうが無いのである。

故にこの點より言ふ時は、獨逸式も天心に當つて居らぬし、又露西亞式も天心に當つて居らぬ。——殊にこの語を今日の題とした私の思ひから言へば、私は西洋の歴史、思想、殊に西洋の宗教に於て何處迄も自分を正義者の立場に立てゝ相手に臨む、あれである限り戰爭は永劫止まぬと思ふのである。實は今次の動亂は軍國主義、民本主義の戰ひと言ひて、民本主義の方に大勢が向つてあるといふのであるも、さてその民本主義か軍國主義との戰ひである限り、濱の眞砂は盡くるとも、必ず一方に新たなる軍國主義が起つて來て、設ひ形式は變つても、結局戰ひは止まぬと思ふのである。本當の正しき狀態に復することは有り得まいと思はれるのである。

八　廉頗に對する蘭相如の心

先づその如く私も初めは我こそ正しの立場でやつて居つたのであるが、既に行き詰つて氣がついて見ると、『之はをかしい、我は蘭相如である、彼は廉頗である、我こそ正しいでやつて居るのであるも、之は第一そういふて自分をよきものにして、飽く迄人に刃向ひ、我慢ばつて居たことが、善く無つたので無いか。之は

蘭相如ぢや〳〵といふて居た自分が、實は廉頗であつたのでは無つたが。して見るとこの世は爭ひの人間ばかしが寄り合ひ、互に我慢張つて居るといふ丈けになるが、それてはこの我慢が永久解決のつきやうがなくて仕やうが無い。何うしたものであらうか』と。『成る程今迄自分が善く仕やう〳〵と、この怖ろしき我慢て人に向つて來たのだもの、人の伏くし無つたも最もである。成る程之は自分が惡るかつた。併しながらその我慢を止めようと言うて、止められるものならよけれども、それが止められぬのだから仕やうが無い』と。そこていつも言ふことであるも、『哀はれ願はくば、自分は廉頗の心で、何處迄も人に爭ひの止まぬ人間てあるが、若し反對に、この廉頗の我に向つて、蘭相如の心を以て向つて吳るゝ者は無からうか。廉頗と廉頗とでは到底解けやうは無けれども、この廉頗の我に對し、蘭相如の心を以て向つて吳るゝ者ある時は、それこそ如何な我慢の我も、頭が下りも仕やう。この我慢が止まぬ人間を、その止まぬが可哀相だと、この者を飽く迄無我無抵抗の態度を以て見て吳るゝ者がある時は、如何な自分もその親切の前には頭が下らうが』と。之が一寸聞くとト翁の無抵抗主義のやうにあるも、ト翁のは人が如何にあるも、此方から抵抗せぬ敎えてある。相手が如何なる態度て我に向はうも、我の方から敵を愛し、我の方から優しく仕て行かうといふ敎えてある。爾るに今言ふのは第一そういふ風に『自分の方から善く仕やう、せぬ』など、その佛氣取りが一番惡かつた。自分の方から佛を拜み、此方から人に善く仕やうなどゝ、そんなこと思うて居たのが怖ろしき間違ひてあつた。敵を愛するなどゝ初めから、人を敵視して懸つて居る奴が敵だつたのてある。初めから人を敵視して置いて、その敵を愛しやうなどゝ飛んても無い間違ひてあつた。成る程俺見たいに人を敵視する奴に遇へば、人がいやな奴だと敵視した筈てある。成る程今迄蘭如相ぢや〳〵と思うて居たのてあるが、そう思うて居たのが怖ろしき廉頗の心てあつたのだが、斯うなつては最早や仕やうが無い。哀はれ世の中に誰か一人、自分がこの廉頗の心てあることに對して、それに咎め立てせず、それに哀れみを持つ蘭相如の心で向うて吳るゝ者ありて、敵なる我を敵を愛する眞實で向うて吳るゝ慈悲者はあるまいかと。若しそれがあれば如何な我慢の我も、その人の前には頭が下らうがと。而してそれを人生の上に無いか〳〵で求めたのであるから、有る可き筈は無つたのてあるが、終に最後に佛の御慈悲に氣がついた時に、佛が惡しきを見捨てぬとの仰せが、實にこの御同情の聲であつたのてある。――こはこの惡しきを見捨てぬとのことは、『惡しくてもよいのだ』といふ如き、そんな輕いことて無い。此方は廉頗の心を持ち、何處迄も人を敵視する心の私てある。爾るにその恐ろしき性を持つ汝が哀はれと、そこを見て下されたる佛は、此方がその性を發揮して、何程我慢て向はうが、『その性分を哀はれと見た上は、それを毫髮も惡しくは思はぬぞ、益々そこを見てやるのだぞ』と、何處々々迄も執念深く敵視してゆく私を、その性分の故に彌々哀はれみを持ち、益々御同情を加えて下さるが遣る瀨無き佛の御慈愛であつたといふ、私、之を知らせて貰うたから、初めて『そういふ有難い思召てあつたのか』と安心させて貰へたのてある。

九　『惡しくてもよい』は大誤謬

故に私、吳々も言ひ度いのは私なども信仰に入らせて貰ふ迄は、佛が惡しきを見捨て給はぬとのことは、『惡しくても構はぬとのことだ』と、一途に思うて居つたのてある。之は余程注意しなくてはならぬ。能く他力を言うて居らるゝ人が、『惡くてもよいと言うて下さるのだ、構はぬと云ふて下さるのだ、金使してもよい

と言つて下さるのだ』と、斯ういふ言ひ方を仕て居らるゝ。こんなこと何程聞かされたつて、私共本當に安心がされやう筈がないのである。第一青年の方などは、『惡くてよいと何程言はれても、此方は惡いのがいかぬから苦しんで居るのである。それにそんなこと何程言はれても、あなたの方はよくても、此方は惡くてはいかぬから困る』と、必ずそう思はれるに決つてるのである。』よく私共苦しい時に我と我が心に自問自答して、『佛は惡るくてもよいと言うて下さるのだ。——併しそれは分つて居るも、斯う惡しくては困る』と、斯ういふ聞き方だと、必ず斯うなつて來る。仕舞ひにはそれでやつてもいつ迄も切りがつかぬもの故、變なことになりて、現に眞宗中て言ふ人がある。『眞宗の敎は後生の一大事の上では惡くてもよいのであるも、この世のことは善くせないかぬのだ』と。甚しいのになると、『他力の上て惡いと言はれるのは、あれは人生的には左程惡くは無いのであるけれども、罪惡觀を起させる爲めあーあるのだ』と。まるで何のことだか分らぬとになつて仕舞ふのである。能く『囚人に『獄異鈔』を讀ませるのは、あれはよく無い、惡しくてもよいと書いてあるのだから』と、斯ういふやうなことになつて來る。すると又一方は『いやあれは本當に惡しくてもよいと感ずるので無い。あれは宗敎上あー思ふのだ』と、何のことだか薩張り分らぬ。これが皆な結局先き程言ふ『惡くてもよい』と、『惡しくては可かぬ』の思想上の戰ひから、斯ういふことになりて來るのである。我々惡しくて可かぬといふのも我慢が止ぬで居らぬのてあるし、惡しくてよいと言ふのも、そんなことて眞の安心は出て來やう筈が無い。我々借金に惱んて居る時に、人が『借金してぢないぞ』——そんなこと言はれても、『貰方はよくても、此方は借りて困る、借りた物なら返へさねばならぬて無いか。』——そう言うて見たもの

ゝ事實金が無くて返へせぬ、仕やうがない。すれば返さないでもよいでも安心は出來ず、されば返と言つて、返やさうにも金が無くて何とも仕やうが無い。そこへ一人の人現はれて、『その返す可きのが返へせぬの故、如何にもお氣の毒である。如何にも返さねばなるまい、宜しい、自分が引き受けた、心配するな、』と、斯う言つて呉るゝ人が出て來ねば、本當に安心はされぬのてある。故に他力は『惡しくてもよいぞ』の敎ても無く、又『善くせよ』の敎ても無い。『善くせねばならぬ』は言ふに及ばぬも、その爲べきことが出來ざる私故、『その仕やうの無きを哀れみて、その汝を何處迄も見てやるぞ、捨てぬぞ』との御眞實てましますのてある。これが他力の正意てあると、斯ういふ事になるのてある。

一〇　大阪、岩本氏の場合に於て

以上は大分妙な申し方になつたのてあるが、そこで之を具體的にいふ。常に言ふ處の大阪の岩本氏の場合である。殊に昨今の如き財界の變動著しき時には、斯ういふことも出て來やうと思はれるのてあるが、昨年大阪の岩本氏が財產上の蹉跌から皆んなに損掛け、自殺して申譯けせねばならぬと言うて、終に自殺して果てられた。嘗つては非常の義俠心から、大阪市へ百萬圓の公會堂を寄附せられた處の人である。『一方に公けの爲めそれ程の事仕て居られる人だから、一方に少し位損害懸けてもよいでないか』と、言う人があるかも知れぬ。けれども岩本氏にする時は、そういふことを仕て置いた丈け、そう迄仕た者が、斯くの如き不始末なことになつてと、よけ苦しい。結局自殺するより道がなくなつて仕まはれたのてある。處が之を『死んだとて申譯けの立つものでもなく、出來たことは仕やうが無いて無いか。』これになると即ち北濱銀行式になる。即ち

茲北濱式に出るか、岩本氏になるか、この二道より仕

やうが無いのである。こは個人にしても同じで、苦學生が學費を求めて勉強仕度い。費資が得られぬ、止めるより仕やうが無い。仕やうが無いけれど勉強は仕なくてはならぬ。斯うよりして考えて見やうが無いのである。そこで岩本氏が飽く迄眞地目に考えて、彌々死ぬるとなられた時に、

一人の同情者が現はれて、『成る程君のそう考へられたは無理が無い。如何にも然うしか出られぬだらう。去りながらその君の返へせぬのを氣の毒と見た上は、宜しい、何處迄も僕が引き受ける。心配仕給ふな。』と、言うて呉るゝ者が無くてはいかぬ。卽ち

それが救といふことなのである。

處でこれを言ひつゝ私が苦しきは、この例の方は引き受けて金出して呉れ手がある話故、實際的に分りよい。處が

お慈悲の方は金の實物を呉れる話で無い。金呉れるは難故困るのである。故によくこの話をすると、『先生、そういふ同情者が實際にあれば宜しいけれど、言葉ばかり故困ります』と言ふ人がある。必ずしも金に限らず、自分の子供が病氣、危篤、もう仕やうが無いといふ處へ、それを救ひの名醫が來り、病氣を癒して呉れる話なら、之だと大に分りよい。處がこの方は喩で、肝腎の實際お慈悲の方は、金呉れ、病氣癒して呉れる事實が與へられるのでなく、卽ち

言葉ばかりで肝腎のパンが無いのだから、喩は分るも佛は分からぬと言ふ人がある。茲は一つ大に聞いて頂き度い處である。

一一、岩本氏は金で死んだか、思想で死んだか

茲はちと激しいけれど、私は裏から言ふ。成る程岩本さんなる方は、金の問題に蹉跌して、金を無くして自殺せられたのである。けれどもあの人は本當に

金で死なれたのか、思想で死なれたのか、といふのである。成る程北濱式に横着に考えて生きて行くのも思想であらうけれども、岩本氏の如く眞地目に考えて、道德上行き詰まり、終に死なれたも、

思想で死なれたのである。あの場合あれ丈けの金を亡くせられても、若しあの方の思想上に生きる可き餘地あれば生きてけるの故、あれは思想で死なれたと思ふのである。その代はり設え金が與へられても、思想上生きるべき餘地が無ければ、果して生きられたか何うか分らぬ。若し茲に久原といふ如き人が來て、『よし、君の借金殘らず引き受けやう』と言はれても、果して難有いと受けられたか受けられぬか、危いと思ふのである。或は『有難いには有難いにも、僕の失敗の故に君に迄迷惑かけ、多くの人に災害を及ぼして、平然生きて居ること出來ぬから』と、卽ち金で以ても救ふこと出來無つたかも知れぬ。若し金なら、

自分でこしらえることが出來た金なら、よかつたらう。それは自分の力で出來たといふ處があるからであるが、人のなら何程引き受けやうといふ同情者はあつても、自分が作つたので無いから、『御厚意は有難いけれども』といふことになつたかも知れぬ。これが必ずしも岩本氏ばかりで無く、先き頃の

押川長官の場合だつて、同じなのである。それを長官が責任を感じて自殺したと傳はつた時、日本の新聞紙は一時無暗に譽めたことがあつたが、その後收賄問題に關係があつたことが分るなり、忽ち惡口言ふことを主とするやうな書き振りに變つて來た。私甚だその意を得ぬと思ふのである。言ふ人自身が內面それに類するやうなことをやつて居り、世間の者が皆なやつて居て、惡いと評判が出ると、惡く言はぬといかぬかのやうに惡口をいふ。私或る時あの件に就き、雜誌に諸家の意見が載つてあるのを見た。皆な惡く言ふばかりで一向同情の無い書き方が仕てある。何も既に亡くなつた人の上に、石墜すやうのことするに及ばぬと思ふのである。佛のお慈悲の上より言ふと、惡しきには惡しき

に違はぬも、その惡しきの上に注がれるのが佛のお慈悲である。爾るをあれは氣の毒のことであつたと思ふ次第である。

一二　廻心の一點

そこで今これ等の場合に於て、茲へ一人訪ねて呉るゝ人ありて、『彌々君のそういふ風に行き詰まられたを見ると、如何にも氣の毒である、同情する。斯く同情する餘り、僕の方から態々訪ねて來た上は、君の借金が何程あらうと、僕はイヤとは言はぬのだ、殘らずを引き受けやうと言ふのである。有る丈けを僕の前に出し給へ』斯く言はれても今言ふ如く自分の不始末を人の金でなして貰つたのではをもしろく無い。『イヤ御厚意は有難いけれども、私が惡いの故何とか致します。』斯くいふ奴をこの人は、『君致します〳〵て、君で出來る程ならば、態々訪ねて來やせぬのである。君は致します〳〵と、腹切れば責任盡くされると思ふて居られるやうであるが大間違ひぢや。腹切つたつて何ともならぬでないか』と、私自殺はこれで言ふのである。『その腹切つたて及ば無いそこを僕は察したのである、汲んだのである。その仕やうの無いそこを氣の毒と同情した僕である上は、――（餘り物質的な言ひ方であるも）――君が如何程の借金有らうが、それをイヤと思ふ僕で無い。それがある爲に君の仕やうの無い、そこに同情を持つたのだもの、心配して貰ふに及ばぬ。それを引受け度さに態々斯く身を差出して言うて來てる僕で無いか』と、茲まで言はれると如何な敗けぬ氣の岩本さんも『ウン、この僕の爲めにそこ迄言うて呉れる君の友情か、それ程の偉大なる君の同情か、なる程これ迄我慢ばかし言うて濟まなんだ。こらえて呉れ』と、これで岩本さんが立てる所が出て來ると申すのである。必ずしも與へられる物質よりも、その物質の意味は『汝のその行きついた處に氣の毒と同情を持つたのが我である。設え何程借金が有らうと捨てゝ置くものか。全財産を投げ出しても救はな置かぬぞ』の、この先方の實意を聞くと、この眞實の前に頭が下り、『有難う、今迄自分でやれるものゝやうに思うて居たのが濟まなかつた。』とこれが一寸聞くと金で救はるゝが如きも、金ではいかぬ。その先方の眞實の爲に、此方の心が一つ變る所が無く

てはいかぬのである。こゝが六かしい所で、こゝが信仰の旨味――こゝが信仰に於て唯一つ自分の思惑を廻へして、佛の惠みに隨順する處である。

一三　基督敎には廻心味無し

これは先般も知人に基督敎に這入つた人がある。段々言はれる處を聞くと、『自分は神の惠みに這入つて、斯ういふ風に祈ると、其の證がありて斯う〳〵』といふやうの話である。これでは基督敎は全然此方の思惑を立てゝやる所の敎である。これでは信仰にならぬと思ふのである。佛敎にありては自分の思惑を廻へして、哀はれみ給ふ處の佛の眞實に歸入して生きる。若し自分の思惑でゆくのなれば、何程眞地目に何程己を捨てゝやるのでも。結局『そう仕て居る自分は善い〳〵、人は惡い』――これになりて百千萬年努めても、本當にならぬのである。こゝは寧ろ斯く飽く迄も自己を主張し我慢ばる外に知らぬ恐ろしき心の私を、その仕方のなき者故飽く迄悲憐し給ふ大悲の眞實に遇ひ奉つて、初めて日比の思ひを廻へして、御慈悲に救はれるとなつて來ねばならぬのである。

一兩日前にも以前基督敎風であられた或方に遇つたのであるが、――近頃は何ういふものか基督敎でやつて居て、いけなくなつて聞きに來られる人が數多いのである。折々そういふ方の御來訪に接する。兩三日前のは或青年の方で、病氣危篤になられたを房州迄見舞ひに參つたのであるが、その方の母なる方が長らく茲で喜んでゝ下さる方で。先年帝大を出られた人で、至つて修養深い方である。必ずしも基督敎といふ譯けでも無つたが、余程基督敎趣味を持つた人で、私折々御話したのである。母なる人が頻りに信仰に入れ度いと言はれたのであるが、長らく病床に居られて、私話にゆくといつも『私は斯う祈ります。出來ることなら再び快くなつて、母を安んぜしめるやうにならしめ給へ、去りながら御心の儘に爲し給へ、と私は斯う祈ります』と言うて居られたのである。併し私『それでは本當に心がらくにならぬで無いか』と申して居つたのであるが、今度彌々病氣危篤といふので參つて見ると、氣管の病氣で、痩せ衰へて、雙頰より涙雨の如く流し、頻に御親の

名前の名號を呼び立てて、南無阿彌陀佛々々々と偏に念佛しづめて御いでになる。すると母親がその息子の手を取つて、これ又涙雨の如く、南無阿彌陀佛々々々と、相擁して二人が泣いて念佛して居られるといふ有樣である。私も初めは氣の毒で、見るに堪えなかつたのであるが。その私も又泣いて二人の後に立ち、一向に念佛稱へさせて貰うて來たやうなことであつたのである。その方の信仰の變られたことは、前から聞いて居つたのであるも、面の當り參つて、味ひの深きを見せて貰つて來たやうなことである。我々人生にありて自分の思惑を立てゝ『あゝあらしめ給へ、斯うあらしめ給へ』と、これを言うてる限りは南無阿彌陀佛の眞味は出て來ぬ。人生親と言はうが、子と言はうが、彌々になると苦しみばかり、その仕やうの無きを佛乘ねて知召して

生死の苦海ほとりなし、ひさしく沈めるわれらをば、
彌陀弘誓の船のみぞ、のせてかならずわたしける。

その者を見捨て給はざる眞の御心の塊りの南無阿彌陀佛。その者に稱へさせるやうに與へて下された南無阿彌陀佛。その御眞實の此方の心に樂いて來た時には、如何なる者も恐入りて

たゞ念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せをかうふりて信ずる外に別の仔細なきなり。

故に初めに申した近頃はき違えて基督教になつた人に、私は申したのである。『君そんなこと言はれるも、君の天地が眞暗となり、彌〻仕て見やうの無いとなつた時に、私のいふ精神が君に屆き、その時は君腹底からでんぐり反つて廻心せぬならぬ時がある。その時迄私の言うて上げることは君には分るまい』と言ひ放したことであつたのである。而して丁度その人に言うたことを今の病人の方の上に見せて貰うた。如何にも佛の惠みを面の當り病人の上に活きて見せて頂き、有難く歸つて來たやうなことである。即ち我々信仰に入るは、

自分の思ひを廻へして信仰に入る。『式文』の御言葉に

誠なる哉、斯の言、疑ふ者も必ず信を執り、謗る者も遂に情を翻へす。

我々思惑を翻へして、淺間しきを御見捨て無き御慈悲に夜を明けさせて貰ふが信仰の味ひである。

『慈光錄』序文

山に入る者は復た山を出て、水底を窮むる者は能く水上に浮ぶ。若し夫れ絕對究竟の大信海に徹底し去らむか、必ず自然に相對人生の廣海に游泳して、至德の風靜かに、衆禍の波轉するの妙趣を展開し來るものである。是眞宗敎の極致は、眞人生を實現する所以である。親鸞聖人が眞宗を肇めらるゝや、往還二種の廻向を以て其根本義とし、入出二門の功德を以て他力の極致とせられたは、實に此宗敎の眞髓を窮盡せられたる焦點である。

徹底なる標語は現代人の思想及生活に於て、最も狙らはれたる射的である。而して徹底せんとあせりつゝ、徹底し得ざるが理想家の血涙を注ぐ點である。親鸞聖人の金剛の眞信たるや、自力修養によりて徹底せるにあらずして、如來の眞心が罪惡の我等が胸底に徹到し來りて、心髓に透入することである。茲に中心の慚愧懺悔を生ずる次第である。聖人が誠に知りぬ、悲哉愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず、愧づべし、傷むべしと、悲歎述懷せられたるは、我等が人生生活の闇黑を照したまゝ燈明臺である。本書は實に聖人の跡を慕へる著者が、中心の慚愧懺悔に外ならぬことを告白する次第である。若し夫れ舊著『信仰之餘瀝』及『懺悔錄』を以て入信一念の懺悔とすれば、『慈光錄』は信後生活の慚愧と謂つべきである。

『能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃。』是親鸞聖人の眞宗の眞面目である。理想家が徹底の峻嶺を越ゆる能はざるは、煩惱無盡誓願斷の自力修養を以て、菩提の崖嵬に攀ぢんとするからである。併動もすれば現代人が煩惱即菩提の口實を以て、自然放縱の生活を塗糊し、產業即實相の主張の下に、我執呑噬の爪牙を逞ましくせんとするが如きは、忍ぶべからざる悲慘である。煩

惱無盡の我等、唯盡十方無碍光の慈悲に融化せられて、初めて煩惱の氷解けて功德の水となり、玆に心光攝護の眞人生を實現し來るのである。

親鸞聖人の信仰は、現生の一念に如來の慈光に接觸することである。而して其最高の理想たる眞證は、穢土の現身にあらずして、彼岸の涅槃常樂の眞身に入るときである。故に現在の人生は飽まで煩惱の稠林である、生死の花薗である、而も彼岸の光明は、此薗林に反射し來りて、人生を莊嚴する崇高なる理想を齎らし、森嚴なる意義を實現すること、恰も楊柳枝頭の露、滴々天上の月を宿すが如く、卑濕淤泥の裡、清淨無垢の妙蓮華を生ずるが如くである。かくして健實なる國家平和なる社會、清潔なる家庭を建立し得べきである。然れども是如來の建立したまへる淨刹の返照にして、眞心徹到の金剛信より來る、自然法爾の餘德たることを忘れてはならぬ。併既に煩惱の稠林である、生死の花薗である、叢林棘刺もあれば、暴風駛雨もある、愛憎違順、高阜嶽山もある。而して此間に處して『譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇。』といへる信後生活の光景を實現し來るに到りては、妙趣言語に絶し、至高道理を超え、唯佛智不思議と讃仰するの他なし。本書說くところ此慈光遐被の嘆咏たらざるはない。其理想といひ、修養といふ皆信後に屬するもの、讀者之を以て信前の空想、自力の修養と誤解して、求道の躓となさゞらんこと、著者の杞憂に堪へざる所である。冀くば求道の士、先づ眞心徹到の後、逍遙として自然に人生薗林の莊嚴を體得せられんこと、至願に堪へざる也。

大正七戊午歲七月十六日夏季求道會『正信偈』講讃後

近角常觀識

米價調節と人心調節

○米價調節問題をきつかけに、全國各地に非常なる動亂を惹き起した。畢竟米價調節問題は、米價其物よりは、寧ろ人心の調節を失つて居ることに胚胎して居る。而してこの度びの動亂は、その人心の不調節を遺憾なく暴露したものである。

○米價のみならず、總て物價の暴騰は、畢竟世界の動亂を機會に、火事場泥棒的なる暴利を貪る投機心より起し來りたる人心の不調節である。而して政府の之に對する態度たるや、暴利に對して暴令を以てするの遣り方で、律法的强制を以て人心を抑壓せんとすること、その害水を防ぐより甚しきものにして、その反動天に漲らずんば止まざる勢ひである。畢竟暴に代ふるに暴を以てするものである。

○果せる哉、米價の暴騰を機會に、全國の暴動を惹き起したものである。この暴動たるや奸商米商に對する反感を爆發したるものには違ひ無けれども、その眞相を洞察するに、必ずしも生活難のみより來りたるものゝみと斷言することは出來ぬ。寧ろ勞働者の如きは、却つて月給取りよりも金錢の廻はりはよいのである。又米價の騰貴と雖も、他の物價に比較するに、必ずしも暴騰とのみ言ふ可らざるものがある。而して斯くの如く意外千萬なる事變を惹き起したといふものは、畢竟この機會に於て平生鬱勃したる人心を爆發したといふ可きである。

○政府の抑壓的政策の不可なるは言ふ迄も無いが、この機會に爆發したる人心の趨勢は頗る憂ふ可きものである。蓋しこの事變に煽動者ありや。若しありとすれば何れに存在するやは頗る耳目すべき問題なりと雖、

兎に角之等の機會に動搖を來したる群衆心理なるものが、甚だ面白からぬ現象である。必しも生活難より來る深刻なる聲にはあらず、社會政策より來る秩序ある運動には非ずして、所謂野次氣分と破壞的好氣心に驅られたるものが多いであらう。一言にして言へば、確に輕佻なる妄動と評すべきものが多いであらう。

○斯く言へばとて露西亞その他に於て起れる社會的運動に鑑みて、深慮を以て之に臨むべきは言ふを俟たざれども、昨今俄に恐慌の態度を以て勃興し來れる救濟的政策なるものも、又必ずしもその當を得たものとも思はれ無い。民を壓する時は恰も水を防ぐが如く、水溢るゝに及んで忽ち自ら堤を決して、氾濫せしむるが如き結果とならぬか。群衆の妄動に驚きて俄に掌をかへすが如き一時的の救濟策の如きは、果して人心を救濟するを得べきか。寧ろ人心の動搖を誘致するの恐れは無きか。茲に至りて精神的徹底無くして、只物質を以て救濟を爲し遂げらるゝが如く考えらるゝ所謂慈善者流の心事にも、頗る倦き足らぬ處がある。

○全對救濟といふことが、そのやうなる簡單なる手段を以て完成さるゝが如く考ふるが誤謬である。救濟は必ずしも物質によりてなさるゝものでは無い。物質上に與ふることが、精神上に却つて救濟されぬ事もある。いつも信仰問題にて論ずるが如く、如何程濫費しても富豪の金を費すも當然であるが如き心理狀態であつたならば、決して精神的に救濟さるゝもので無い。所謂自然放縱破壞無秩序の精神狀態は、昨今の如き救濟方法に於て、決して徹底すべからざるものである。

○實に日本の現狀は官僚的律法的方法を以て人心を抑壓せんとするものと、放縱的自然的破壞的方法を以て人心を佻發するものとの、二傾向の外を出づるものは無いのである。茲に於て益々精神的救濟、徹底的信仰、自發的確信の立場に立ちて、眞地目にして餘裕ある眞實無碍の解決を爲すべきである。

新刊　近角常觀著

求道叢書　第一編

慈光錄

目次

一　活ける理想は人生を靈化す
二　信仰の實驗を論じて戰爭の意義に及ぶ
三　宗教最高の理想及び是より來る人生觀
四　夏季の修養及び信仰と戒律
五　信仰の門戸と堂奥
六　信仰的生活論
七　感謝は信仰の反射也
八　自然法爾は信仰圓熟の極致也
九　清澤滿之師及其信念
一〇　父の示寂によりて敎へられし眞實證の靈境
一一　母を奉じて磯長の廟に詣づるの記

定價　八拾五錢
郵稅　六錢

●本書は『求道』第一卷及び第四卷に掲載せる著者が力作十一編を選みて收錄刊行す
●蓋し一念徹底の信源より顯現し來る實際生活の內面的風光を告白描寫せるものにして、著者が筆にかゝるものとしては、これ迄に表はれたる中の最も心力を傾注せる文字なり
●猶ほ加賀國專光寺所藏親鸞聖人眞筆聖德太子二十句偈文を原本大のコロタイプ版に附して冠頭に添付したり

新刊　求道發行所發行

東京市本郷區森川町一　振替東京一六六九六番　電話小石川一六四一番

求道第拾四卷第四號（大正七年三月八日第三種郵便物認可
大正七年八月十五日發行（毎月一回十五日發行）

近角常觀著

信仰之餘瀝

第十版　定價廿五錢　郵税四錢

信仰問題

第四版　定價七十五錢　郵税六錢

懺悔錄

第十版　定價廿五錢　郵税貳錢

●求道讀者諸君に限り御便利集金郵便の御注文に應ず

東京市本郷區森川町一
振替口座東京一六六九六番　求道發行所

講話

求道會館（本郷區森川町一番地）
毎日曜午前九時　毎土曜午後七時
毎月十五日午前九時　愛信會
毎月廿八日午後七時　聖會

第二求道會（九段坂佛教倶樂部）
毎土曜午後二時

第三求道會（日本橋鋼鐵町説教所）
毎月二十七日午後七時

日曜學校（求道會館）
毎日曜午前八時

●本誌は毎月一回十五日發行とす●誌代は總て前金御拂込みのこと●送金は成るべく振替によられたし●郵便爲替の場合には振替局は本郷區森川町局宛のこと●郵券代用は一割増●宛名人は凡て求道發行所のこと

定價一部十四錢（六ヶ月分八十錢　一ヶ月分壹圓五十錢）（郵税不要）

大正七年八月十二日印刷
大正七年八月十五日發行

發行人　近角常觀
編輯人　近角常音
印刷人　白土幸力
東京市本郷區森川町一番地

發行所　求道發行所
電話（小石川一六四一番）振替（東京一六六九六番）